

流行性肝炎の疫学的研究

第 3 編

流行の推移に伴う流行性肝炎の臨床症状に関する検討

岡山大学医学部第一内科教室 (主任: 小坂教授)

小 野 延 宏

〔昭和34年9月29日受稿〕

緒 言

前2編において岡山県赤磐郡熊山町の流行性肝炎の流行状態を経年的に検討し、流行の推移に伴う変化を明らかにした。

教室小坂は北岡に従い流行性肝炎の病型を定型、不定型(黄疸, 感冒, 胃腸), 不顕性感染に分け、之に潜在性肝炎を追加した。流行時不定型乃至無黄疸型の多いことは、多数の諸家により指摘されている。不全型の頻度は Willams, H. J. は1.6%, Pollack, M. R. 10~20%, Barker, M. H., Capps, R. B., Allen, F. W., Havens, W. P. & Paul, J. R. は黄疸型と無黄疸型は 1:1 と報告した。小坂は岡山県各地の流行の調査から、流行地により病型は著しく変動することを明かにした。

然し同一地域の流行において、経年的にその病型乃至臨床症状は変化するであろうことは推測しても、これを明確に実証したものは寡聞にして聞かない。そこで著者は前編に引続きこれらの詳細な検討を行い、興味ある成績をえたので報告する。

検 索 対 象 並 に 方 法

検索対象は第1, 2編と同一の患者を用いた。

臨床検索は昭和病院において診察するか、患者に外向いて診察するかの手段を用い、カード式方法により記載の誤漏を極力防いだ。

検 索 成 績

1. 前駆症状。前駆症状には全身倦怠感, 心窩部不快感, 食思不振, 頭痛等を訴えることが多く27年には86例中50例58.1%認め、28年には100例中51例51.0%, 29年には131例中39例29.7%と減少している。

2. 発病様式

(1) 急激。急激に発病したものは27年には86例中53例61.6%, 28年には100例中31例31.0%, 29年には131例中15例11.4%と次第に減少している。

(2) 漸次。漸次に発病したものは27年には29例33.7%, 28年には65例65.0%, 29年には113例86.2%と次第に増加している。

(3) 悪寒。悪寒を伴って発病したものは、27年には32例37.2%, 28年には12例12.0%, 29年には7例5.3%と次第に減少している。

(4) 悪寒戦慄。悪寒戦慄を伴って発病したものは、27年には12例13.9%, 28年には2例2.0%, 29年には2例1.5%と次第に減少している。

3. 発熱

(1) 高熱。高熱を伴ったものは27年には55例63.9%, 28年には23例23.0%, 29年には11例8.3%と次第に減少している。

(2) 微熱。微熱を伴ったものは27年には18例20.9%, 29年には23例23.0%, 29年には26例19.8%とやや減少している。

4. 神経症状

(1) 頭痛。頭痛を訴えたもの27年には50例58.1%, 28年には78例78.0%, 29年には116例88.5%と増加している。

(2) 四肢痛。27年には23例26.7%, 28年には9例9.0%, 29年には4例3.0%と次第に減少している。

(3) 腰痛。27年には19例22.0%, 28年には38例38.0%, 29年には53例40.4%と次第に増加している。

(4) 関節痛。27年には12例13.9%, 28年には11例11.0%, 29年には0となっている。

(5) 背痛。27年にはなく、28年には6例6.0%, 29年には21例16.0%を認めている。

(6) 肩凝り。27年には1例1.1%, 28年には13例13.0%, 29年には12例9.1%となっている。

第 1 表 熊山町に於ける流行性肝炎の臨床症状

年度	27年			28年			29年			總計			
	可	小	豊	可	小	豊	可	小	豊				
地区別	例数	例数	例数	例数	例数	例数	例数	例数	例数	例数			
患者数	38	19	29	47	40	13	100	51	59	21			
症 状	例数	例数	例数	例数	例数	例数	例数	例数	例数	例数			
前 駆 症 状	19 50	12 63.1	19 65.5	50 58.1	23 48.5	21 52.5	7 53.8	51 51.0	15 29.4	19 32.2	5 23.8	39 29.7	140 44.1
発 病	25 65.7	11 57.8	17 58.6	53 61.6	14 29.7	13 32.5	4 30.7	31 31.0	4 7.8	8 13.5	3 14.2	15 11.4	99 31.2
急 漸	10 26.3	7 36.8	12 41.3	29 33.7	29 61.7	27 67.5	9 69.2	65 65.0	44 86.2	51 86.4	18 85.7	113 86.2	207 65.2
寒 戦	14 36.3	5 26.3	13 44.8	32 37.2	8 17.0	4 10	0 0	12 12.0	4 7.8	2 3.3	1 4.7	7 5.3	51 16.0
悪 寒	6 15.7	2 10.5	4 13.7	55 13.9	0 0	1 2.5	1 7.6	2 2.0	1 1.9	1 1.6	0 0	2 1.5	16 4.7
高 熱	26 68.4	14 73.6	15 51.7	12 63.9	10 21.2	11 27.6	2 15.3	23 23.0	5 9.8	5 8.4	1 4.7	11 8.3	89 24.9
微 熱	6 15.7	5 26.3	7 24.1	18 20.9	11 23.4	8 20	4 30.7	23 23.0	9 17.6	9 15.2	8 38.0	26 19.8	67 21.1
頭 痛	23 60.5	10 52.6	17 58.6	50 58.1	36 76.5	32 80	10 76.9	78 78.0	48 94.1	50 84.7	18 85.7	116 88.5	244 73.8
四 肢 痛	11 28.9	3 15.7	9 31.0	23 26.7	1 2.1	7 17.5	1 7.6	9 9.0	2 3.9	2 3.3	0 0	4 3.0	36 11.0
腰 痛	6 15.7	6 31.5	7 24.1	19 22.0	13 29.7	19 47.5	6 46.1	38 38.0	26 50.9	17 28.8	10 47.6	53 40.4	110 34.3
関 節 痛	5 13.1	2 10.5	5 17.2	12 13.9	3 6.3	8 20	0 0	11 11.0	0 0	0 0	0 0	0 0	23 7.2
背 痛	0 0	0 0	0 0	0 0	2 4.2	3 7.5	1 7.6	6 6.0	11 21.5	5 8.4	5 23.7	21 16.0	27 8.5
肩 凝 痛	0 0	0 0	1 3.4	1 1.1	8 17.0	5 12.5	0 0	13 13.0	6 11.7	4 6.7	2 9.5	12 9.1	26 8.2
胸 痛	0 0	1 5.2	0 0	1 1.1	0 0	1 2.5	1 7.6	2 2.0	1 1.9	1 1.6	1 4.7	3 2.2	6 1.8
胸 悶	4 10.5	0 0	7 24.1	11 12.7	4 8.5	0 0	2 15.3	6 6.0	0 0	0 0	0 0	0 0	17 5.3
意 識 障 碍	0 0	1 5.2	0 0	1 1.1	1 2.1	1 2.5	1 7.6	3 3.0	3 5.8	1 1.6	1 4.7	5 3.8	9 2.8
睡 身 倦 怠	20 52.6	10 52.6	4 13.7	34 39.5	22 46.8	28 70	8 61.5	58 58.0	40 78.4	39 64.4	15 71.4	94 7.7	186 58.6
全 身 痛	0 0	0 0	0 0	0 0	3 6.3	3 7.5	0 0	6 6.0	2 3.9	4 6.7	1 4.7	7 5.3	13 4.1
耳 鳴	0 0	0 0	1 3.4	1 1.1	0 0	1 2.5	0 0	1 1.0	0 0	0 0	0 0	0 0	2 0.6

第 3 表 熊 山 町 に 於 け る 流 行 性 肝 炎 の 臨 床 症 状

年 度 別	27 年				28 年				29 年				総 計	
	可	小	豊	計	可	小	豊	計	可	小	豊	計		
地 区 別	例 数	例 数	例 数	例 数	例 数	例 数	例 数	例 数	例 数	例 数	例 数	例 数	例 数	例 数
患 者 数	38	19	29	86	47	40	13	100	51	59	21	131	317	
食 不 振	25	10	17	53	27	22	9	58	21	22	11	54	165	52.0
心 吐	20	8	13	41	16	17	7	40	17	33	18	57	128	40.3
嘔 吐	9	23	4	29	6	12	4	18	8	15	4	19	63	19.8
嘔 物 中 の 血 液	2	5	7	10	1	2	1	3	0	0	0	0	12	3.7
便 秘	12	31	3	21	4	8	1	5	0	0	0	0	26	8.5
下 痢	1	2	2	6	1	2	0	2	2	3	0	3	11	3.4
心 窩 部 圧 迫 感	1	2	3	4	11	23	12	26	19	37	15	52	69	21.7
心 窩 部 疼 痛	6	15	4	13	6	12	5	12	8	15	6	15	39	12.3
右 季 肋 部 疼 痛	0	0	1	3	5	10	4	11	4	7	6	14	28	8.8
下 腹 痛	0	0	0	1	2	4	2	6	2	3	2	4	11	3.4
肝 腫	21	55	7	40	41	87	35	86	46	90	54	190	245	77.2
脾 腫	6	15	2	10	2	4	2	5	0	0	0	0	15	4.7
脾 濁 音 増 大	13	34	2	19	12	25	15	26	1	1	4	5	50	15.7
黄 疸	14	36	9	43	6	12	3	12	4	7	2	7	62	19.5
結 核	14	36	8	46	8	17	3	15	4	7	2	9	69	21.7
合 併 症	0	0	0	1	3	6	0	3	1	1	0	0	5	1.5
後 症	1	2	5	2	0	0	1	1	0	0	1	0	4	1.2
死	4	10	5	11	4	8	5	7	0	0	0	0	13	2.5

(1) 右肋骨弓下にふれるもの。27年には3例3.4%、28年には9例9.0%、29年には38例29.0%と次第に増大している。

(2) ½横指径のもの。27年には7例8.1%、28年には26例26.0%、29年には40例30.5%と次第に増加している。

(3) 1横指径のもの。27年には10例11.6%、28年には26例26.0%、29年には30例22.9%をみとめている。

(4) 2横指径のもの。27年には12例13.9%、28年には22例22.0%、29年には11例8.3%をみとめている。

(5) 3横指径のもの。27年には5例5.8%、28年には3例3.0%、29年にはみとめなかつた。

(6) 4横指径のもの。27年には3例3.4%みとめ、28年、29年にはみとめなかつた。

11. 脾腫。

27年には10例11.6%、28年には5例5.0%みとめ、29年には触知しなかつた。

12. その他の症状

(1) 全身倦怠感。27年には34例39.5%、28年には58例58.0%、29年には94例71.7%と次第に増加している。

(2) 盗汗。27年にはなく、28年には4例4.0%、29年には4例3.0%みとめている。

(3) 発疹。27年には3例3.4%、28年には1例1.0%みとめ、29年にはみとめなかつた。

(4) 眼痛。29年に1例0.7%みとめているのみで、他にはみとめなかつた。

(5) 睡眠障害。27年には1例1.1%、28年には3例3.0%、29年には5例3.8%をみとめている。

13. 合併症。

急性腎炎、顔面神経麻痺を認めている。27年には顔面神経麻痺1例1.1%、28年には急性腎炎3例3.0%、29年には急性腎炎1例0.7%を認めている。

14. 後胎症。

後胎症として認められたものには、耳鳴、視力障害、自律神経の異常がある。自律神経の異常には心悸亢進、不整脈、胸内苦悶感、冷汗等がある。後胎症としては27年には耳鳴1例1.1%、視力障害(視神経炎)1例1.1%をみとめ、28年には自律神経障害1例1.0%、29年には自律神経障害1例0.7%を認めている。

15. 死亡率。

27年には11例12.7%、28年には7例7.0%と減少

し、29年には認めなかつた。

総括並に考按

以上各症状について、その変遷の模様をのべたが、以下これらについて検討してみたい。

前駆症状は流行初期にやや多く、後にはやや減少している。発病様式は初期には急激に発病する者が多く、後になるにつれ発病が緩慢となつている。悪寒或は悪寒戦慄も初期に多く、後には減少している。発熱については高熱を有する者は初期に多く、後には次第に減少し、微熱は流行を通じてほぼ同程度に認めている。神経症状では頭痛、腰痛は後になるにつれ発現率が増加し、四肢痛、関節痛は初期に認められ、後には減少している。肩凝り、背痛、眩暈等は初期には余り見られず、後においてやや多く出現している。耳鳴はごく少数みとめたのみで、差異は認められない。脳症状は流行初期の重症患者多数発生した時期に多く見られ、後に減少している。気道症状では咳嗽、鼻汁漏は初期に少く、後に多くなつている。咽頭痛は初期、中間期に同程度みられ、後期には減少している。胃腸症状では食思不振、悪心は初期より後になるにつれ、僅かづつ減少しているが大した差異は認められない。嘔吐は初期に多く後期に減少している。吐物中のコーヒー残渣様のものは、初期に認められ、次第に減少し、29年には認めていない。便秘は流行当初には認められたが、後には急に減少している。下痢は初期に僅かにあつたが、後には更に減少している。心窩部圧迫感、右季肋部鈍痛は初期に少く、後に増加している。心窩部疼痛は全期間を通じて同程度に認めている。下腹痛は初期には僅少で、後に軽度の増加がみられる。循環器症状では胸内苦悶感は初期に少く、後に増加している。心悸亢進は初期にはなく、後になつて僅かに認めている。浮腫は全期間を通じて余り著明な差異がみられない。結膜の充血、衄血、出血性素質は初期の流行に見られ、後には認めていない。脳症状は初期にのみ認められ、後には認められていない。黄疸は眼球結膜、皮膚ともに初期に多く、後になるにつれて減少している。肝腫脹は右肋骨弓下に触知するものや、½横指径及び1横指径腫脹するものは、初めに少く後に増加している。2横指径腫脹したものは初期より流行の中頃までは増加の傾向にあつたが、後には減少している。3横指径、4横指径腫脹したものは、流行の初期にみられ、後には全く認めていない。なお本疾において肝腫脹の触知しえない例が

流行の全期間を通じて同程度認められたことは附言しておく(10%)。脾臓を触れたものは流行の初期にみられ、次第に減少し、後には全くみられない。その他の症状として、全身倦怠感は初期に少く、後になるにつれ著明に増加している。盗汗は初期には認められず、後になつて少数認めている。発疹は初期にあつて後にはない。眼痛、嘔声も初期にはなく、後に僅かに認めている。睡眠障害は初期にごく僅かあり、後には多少増えているが、著明な差異は認めない。合併、後胎症は流行を通じて大した差異はなく、極く僅かの例を認めている。死亡率は初期に高く、次第に低くなり、後には全く死亡例を認めていない。

個々の症状については以上の如くであるが、これを総合的に考察すると、流行の初期の昭和27年には、高熱を以て急激に発病することが多く、悪寒或は悪寒戦慄をかなり伴っている。神経症状としては頭痛、腰痛の他に、四肢痛を訴えるものが多く、気道症状では咳嗽、鼻汁漏は少いが、咽頭痛を多少より多く認めている。胃腸症状では食思不振、悪心の外に嘔吐を来す者が多く吐物中にコーヒー残渣様の物質を見出すものもこの時期に多い。脳症状で意識障害、不安、興奮、譫語、昏睡に陥つた者は殆んどこの時期に多い。黄疸も出現することが多く、肝腫脹の大きい例も、後期に比して多く認められ、脾腫も多く認めている。衄血、出血性素質、発疹も後に比して多く認められる。なお死亡例も多い。即ち流行初期には典型例が多く且つ重篤なものが多数見出されている。流行が遷延した28年より29年には爆発的に多数の患者を発生したが、この時期のものは急激に発病する例が減少し、漸次に発病する例が増加し、高熱は減少して、微熱又は無熱のものが増加している。悪寒或は悪寒戦慄を伴うものも次第に減少し、神経症状として頭痛、腰痛は多数出現するが程度は弱く、四肢痛、関節痛は減少或は消失している。なお眩暈を多少多く認めている。気道症状では咳嗽、鼻汁漏等と感冒時の症状がやや多く出現している。胃腸症状では食思不振、悪心は初期と大差なく認められるが、嘔吐や吐物中のコーヒー残渣様物質が減少している。又心窩部圧迫感がかなり多く認められる。循環器症状では、心悸亢進、浮腫が多少みとめられ、胸内苦悶感がかなり多数みとめられている。脳症状は昭和28年2月頃までは認められたが、その後減少して29年には全く認めていない。黄疸の出現率も減少し、肝腫脹の大きさは縮小し、肋骨弓下に触れる

ものや、 $\frac{1}{2}$ 横指径、1横指径等と1横指径以下のものが増加し、2横指径以上のものは減少している。脾腫も減少し、衄血、出血性素質、発疹も減少し、29年には1例も認めていない。死亡例は28年に7例あり、29年には1例もない。即ち流行が遷延した28、29年には次第に重症例が減少し、軽症不全型例が増加しているのに気付く。

以上の如く昭和27年より28年、29年となるにつれ、症状は緩和となり、重篤な例が減少し不完全な軽症例が多数を占めている事実が認められる。

流行性肝炎の流行状態を追及した第1、第2編において、初年度の流行は散発的であるが、次年度、次々年度のそれには初年度の患者の周囲に、身体の抵抗の減退を来す時期に一致して多数の患者を発生していることをみとめているが、これには初年度において罹患し、潜在性乃至軽症不全型として経過の後、次年度に発病した症例と推定しており、斯様に初年度と次年度の発病に差異があり、これに更に新患者の発病を入れると、臨床症状の変化も逐年的に生じうることは推定されるところで、感染と免疫の複雑性から来る変化と考へてよいものであろう。

結 論

岡山県赤磐郡熊山町小野田、可真、豊田地区に発生した流行性肝炎の臨床症状は、流行当初の昭和27年より28年2月頃までには典型例、重篤例が多く、流行が遷延した28年春より29年末にかけては、症状も次第に緩和となり不全型、軽症例が増加している事実が認められ、流行の遷延化は臨床像にも著しい変化を来すことを証明しえた。

主 要 文 献

- | | |
|--|--|
| 1) 北岡：医学の進歩，1 (1942) 638. | Havens, W.P. & Paul, J.R.: J. A. M. A. 128 (1945) 990 |
| 2) 小坂：日本伝染病学会誌，28巻 (昭和29) 345. | 6) 小坂：岡山医学会誌投稿中. |
| 3) Williams, H. J.: J. A. M. A. 80 (1923) 532. | 7) Siede, W.: Hepittis epidemica, Johann Ambrosius, Barthiep, Leipzig (1951) |
| 4) Pollock, M. M. R.: Brit. Med J. 2 (1945) 598. | |
| 5) Barker, M. H., Capps, R. B., Allen, F.W., | |

Immunological Studies on Epidemic Hapatitis

Part III Studies on the Clinical Symptoms of Epidemic Hapatitis Accompanied by the Epidemic Transition

By

Nobuhiro Ono

The First Department of Internal Medicine, Okayama University, Medical School
(Director: Prof. K. Kosaka)

Conclusions

The clinical symptoms of epidemic hepatitis at the Onoda, and Toyoda districts of Kumayama-cho, Akayuwa-gun in Okayama prefecture were mostly the typical form and violent form until February 1953 from the beginning of the prevalence in 1952, and the symptoms became gradually mild until the end of 1954 from the spring of 1953 at which time the prevalence became prolonged and the increase of the abortive form and mild form was observed. And it was certified that the prolongation of the prevalence brought remarkable changes on the clinical picture.
